

音曲や踊りなどの芸の他に、客を大尽と称して持ち上げる話術と気遣いを兼ね備えていた。歴史を遡ってみると、幕間の前身は御伽衆だと考えられている。戦国武将の側近で、雑談の相手をして武将の気を紛らわす癒し的存在だった。なるほど話術と気遣いはうなずける。現代に目を向けると、大尽の存在しない時代である。大尽としき財力を持つた人物は皆、生きているうちに使いきれるはずのない更なるお金を求めて躍起になっている。そういう時代に芸や気遣いや、深い遊びの文化が生まれて躍動するわけがない。

●竹の性質（竹の水仙）

日本人が竹製の道具を使い始めたのは、縄文遺跡からザルや籠が出土していることから、縄文時代晩期と言われている。身近に竹が豊富にあり、加工しやすく丈夫で長持ちである性質を既に縄文人は掌握していたと推測できる。竹を割ったような性格という形容詞があるが、これは竹が縦の刺激に非常に弱い性質を物語っている。その逆で名刀の試し切りにも竹が使われる場合が多いが、横の刺激に強い竹を切る（実際は斜めに切る）ことで切れ味を実証する。このことを実証するのが、竹細工に欠かせない竹を割くという行為だ。

ザルや籠も割いた竹を編む。横の刺激に強いので弾力がある。弾力はイコール長持ちという訳だ。江戸時代の家事の道具は、もっぱら竹製だった。竹製品の特筆すべきことは、プラスチックと違い最期は朽ちて自然に帰ることだ。環境問題解決の要である。

●絵草紙屋（幾代餅）

絵草紙屋はつまり本屋なのだが、学問書、教養書、宗教書などの専門書を商っていた「物の本屋」というものもあった。絵草紙屋は浮世絵（錦絵）や黄表紙や淨瑠璃本など娯楽の本を商っていたのである。企画・印刷・出版・販売をおこなう本屋は、江戸時代の初期に京都で始まった。当初は活字印刷が行われたが、木版印刷に切り替わり、これが絵入りの本を売る絵草紙屋の出現に繋がった。元禄（二六八八～一七〇四）前後には読書人口が一気に拡大する。絵草紙屋は江戸時代の後半、江戸でさらに発展し、搗き米屋奉公人の清蔵が絵草紙屋で幾代太夫の錦絵を見るところになるのだ。絵草紙屋業界は急成長して、武士の作家たちを巻き込み、常に新しい出版物の開発をおこなっていた。幕府はこれに警戒を強め、享保・寛政・天保と各改革で出版統制をした。それほど影響力があつたのだ。

次回予告

第 637 回

7月20日(火)より6時開場／6時30分開演

高砂や ○ 柳亭市弥
崇徳院 ○ 春風亭三朝
麻のれん ○ 春風亭一之輔
一眼国 ○ 林家正蔵
居残り佐平次 ○ 柳家權太樓

公演予定 8月25日(水)/9月24日(金)/10月27日(水)/11月26日(金)

□ 当世嘶家氣質 その220・春風亭柳枝と「四段目」

「五十日間の真打披露興行。途中、『もうこれまでかな』という節目が何度かありました。それでも何とかやり通すことができました。ただ、国立（演芸場）だけが一日欠けちゃった・・・。だからね、四十九日なんですよ」

柳枝が真打披露のトリで演じたのは、「子別れ」「愛宕山」（以上、上野）、「明鳥」「妾馬」（新宿）、「佐々木政談」「火炎太鼓」（浅草）、「三枚起請」「甲府い」（池袋）、「船徳」「大工調べ」（国立）の計十席だった。長屋物、廓嘶、政談、若旦那物など、主要ジャンルの「これだ！」という演目が網羅されており、柳枝の力量とこれまでの精進ぶりがうかがえる。

「『柳枝は何でもできる』と言ってくれる人もいますが、『じゃ、柳枝ならコレというネタは何？』と聞かれると、自信を持って答えることができないんです。披露興行が終わった今、披露目でできなかったネタを演じながら、自分の持ちネタを振り返っています」

そんな披露目で演じていない嘶の一つ、「四段目」は五年ほど前、先代春風亭柳朝一門では叔父に当たる一朝に稽古を頼った。

「芝居好きの主人公が、閉じ込められた蔵の中で芝居の真似をする。そこが一番の見どころですよね。同趣向の『七段目』なら、言葉は悪いけど、『だいたいこんな感じ』でやっても何とかなります。ところが、『四段目』は芝居の描写がきっちりできないと話自体が生きてこない。芝居を真似する時間も長いので、ごまかしが効きません」

もともと歌舞伎好きの柳枝だが、「四段目」を演じるにあたって、『仮名手本忠臣蔵』を何度も見直したという。

「自分で演じる気で見ていると、意外な発見がありますね。落語と歌舞伎のセリフはまったく同じではないの。『四段目』の由良之助は、落語のようにバタバタとは出てこないし、判官の『待ちかねたア～』もさらりと言っている。そのまま真似すれば本物の芝居に見える、というわけじゃないんですよ」

柳枝版「四段目」のもう一つの魅力は、小僧の定吉の何とも言えぬ愛らしさだ。

「もともと子供が好きで、塾講師なんかもやっていました。自分の子供（現在、一歳半）がきたら、もうメロメロですよ。（『双蝶々』の）定吉殺しの場面なんか、絶対にできませんよ！」

芝居と子供、好きなものばかりが登場する嘶だが、「四段目」は演じてみると、なかなかの難物なのだった。

こういうネタに向き合い続けて行く先に、「何でもできる」柳枝の、本当の十八番ネタが見えてくるのかもしれない。

（長井好弘）

芝居研究会

第六百三十六回

日時 ● 令和三年六月二十九日(火)より六時三〇分開演

会場 ● 国立劇場△小劇場▽

主催 ● TBSテレビ

『演目』

動物園 ● 桂優々

春風亭正太郎 改め

四段目 ● 春風亭柳枝

鰻の帮間 ● 桃月庵白酒

『仲入』

竹の水仙 ● 林家たけ平

幾代餅 ● 柳家さん喬

三味線 太田園子 笛 古今亭志ん吉

松尾あさ子 太鼓 入船亭小辰

前座 三遊亭ごはんつぶ

新・落語掌事典 (二二六) 田中優子

● 着ぐるみ・縫いぐるみ (動物園)

着ぐるみという言葉はメディアによつて作られた。それからまだ日が浅い。着るために作られた縫いぐるみを表現したもので、おそらくテレビや映画の怪獣に端を発した造語であろう。今日ではテーマパークやイベントなどで日常的に見ることができるし、言葉としても定着している。しかしそれ以前にも着ぐるみ自体は存在した。歌舞伎や狂言では動物や怪物に扮する役者が、その形に作られた衣装を着て舞台に登場した。この衣装を縫いぐるみと言つた。舞台では役者の演技力と舞台装置が物を言う。更につくりものや音の演出で世界を表現し、決して本物の動物や樹木などを使うことはない。そこで、縫いぐるみを着て演技をするという発想が選択される。この演目は動物園での嘶だが、江戸時代の見せ物小屋などでも実際にあつたのではないだろうか。

● 芝居を支える人々 (四段目)

嘶の中で丁稚が「下つ端の役者」と言う場面があり、演者に

● 帮間が通用する条件 (鰻の帮間)
帮間は、最も多い東京でも今は6人しかいないようだ。職業として定着したのは宝暦(一七五〇~六三)の頃で『吉原細見』に男芸者の名で掲載されるようになる。後の本業となる客を喜ばせ宴席を盛り上げる仕事の前は、遊里に客を同伴する案内人であつたようだ。

(裏面へづく)

よつては「稻荷町の」という場合もある。淨瑠璃や歌舞伎は江戸時代に盛んになり、同時に劇場の構造や内部のしくみの整備も進んだ。とりわけ楽屋が複雑になった。当初は能舞台のように共同の楽屋だったが、次第に立役と女方に別々の個室が与えられ、座頭(ざがしら)や幹部役者の個室、作者部屋、その他の役者の大部屋など、しきたりや厳しい規律に従つて細かく区分された。大部屋は一階にあり、芝居の守護神である稻荷大明神が祀られていたことから、大部屋を利用する新入りや端役等その他大勢の役者を「稻荷町」と呼んだ。役者以外に芝居を支える様々な裏方がいたので、部屋を確保するために、表向き二階建てだが「中二階」と称して三階もあり、三階以上の建築禁止令をしたたかにかいくぐつていた。